

学位請求論文審査要旨

報告番号: 甲 第 号

氏名: 三好 香次 君

論文題目: ダンスアートにおける美的評価の普遍性と多様性

審査担当者

主査: 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会科学研究科委員

博士 (人間環境学)

川畑 秀明

副査: 慶應義塾大学経済学部教授・大学院社会科学研究科委員

博士 (心理学)

中野 泰志

副査: 亜細亜大学経営学部准教授

博士 (工学)

鹿内 菜穂

1. 本論文の概要

本論文は、ダンスアートにおける美的評価を対象とし、その評価がいかにして鑑賞者間で共有されうる普遍性と、個人の経験や文化に依存する多様性の双方を持つのかを、実験心理学的アプローチによって実証的に検討したものである。ダンサーと鑑賞者の相互作用における解釈の共通性と差異を基に、ダンスが感情と身体、人々を結びつける社会的機能を持つことを理論的に整理して、生物学的根拠と社会文化的根拠を統合的に捉える研究枠組みを提示し、共通性と分析する手法としてMM1という統計手法を導入する意義を明確化した。その上で、4つの研究に基づいて、鑑賞者の熟達性・芸術領域差・ダンス形態・音楽との適合・感情表現と身体反応といった観点から鑑賞が能動的かつ身体的過程であることを示しつつ、美的評価には領域横断的で生物学的に基盤づけられた側面がある一方で、身体経験や文化に基づく差異が併存することを示した。また、ダンスアートの美的評価を普遍性と多様性の相互作用として位置づけるとともに、芸術研究と実践研究を架橋する理論的貢献の拡張性を示した。

2. 本論文の構成 (目次) (章, 節, 項までを掲載し, 目は省略)

第1章 研究背景と問題提起

1.1 はじめに: 本研究で用いる用語の整理

1.2 ダンスの定義及びダンスに含まれる要素の定義

1.3 ダンスの機能

1.4 ダンスの社会的意義

1.5 本研究のテーマ設定

1.6 先行研究の概要

1.6.1 研究テーマに関する先行研究

1.6.2 実験美学・心理物理実験に関する先行研究

	1.6.3 芸術表現の根拠に関する先行研究
	1.6.4 ダンスの実践に関する研究
	1.7 本研究における問題提起
第2章	問題提起に対する本研究の取り組み
	2.1 本研究の意義
	2.2 本研究の目的
	2.3 本研究における重要な用語
	2.3.1 表現者と鑑賞者の相互作用と美的評価
	2.3.2 身体性
	2.3.3 共有性と独自性を分析する手法：Mean Minus One (MM1)
	2.3.4 生物学的根拠と社会文化的根拠
	2.4 本研究の仮説
	2.5 本研究の下位研究の関係
第3章	研究1 ダンスの美的評価に及ぼす鑑賞者の熟達性の影響
	3.1. 問題の所在と目的
	3.2 方法
	3.2.1 実験参加者
	3.2.2 刺激
	3.2.3 手続き
	3.2.4 データの前処理および分析方法
	3.3 結果
	3.3.1 基本統計量と分布の確認
	3.3.2 一般化線形混合モデルによる分析
	3.3.3 Marginalized Modelによる総練習時間からの分析
	3.3.4 実験参加者間と刺激間の評価一致係数（MM1）からの検討
	3.4 考察
	3.4.1 評価者の熟達性が評価に与える影響
	3.4.2 総練習時間と再現可能性認知の関係
	3.4.3 評価一致係数（MM1）による共有性や独自性の検討
第4章	研究2-1 美的評価の普遍性を探る
	4.1 問題の所在と目的
	4.2 方法
	4.2.1 実験参加者
	4.2.2 刺激
	4.2.3 SD法による印象評定
	4.2.4 手続き
	4.2.5 データの前処理と分析方法

4.3 結果

4.3.1 絵画のみとダンスのみに対する印象評定の因子構造の比較

4.3.2 両者に共通する因子による領域間及びジャンル間の比較

4.4 考察

4.4.1 絵画のみとダンスのみに対する印象構造の共通性と独自性

4.4.2 両者に共通する因子における領域間やジャンル間、鑑賞者間の変動

4.4.3 ストリートダンスを用いた本研究の妥当性と限界

4.4.4 まとめ

第5章 研究2-2 異なるダンス形態における印象評定への鑑賞者の熟達度の影響

5.1 問題の所在と目的

5.2 実験I：ソロとグループの比較及びストリートダンスの印象評定尺度の確認

5.2.1 目的

5.2.2 方法

5.2.3 結果

5.2.4 考察

5.2.5 実験IIへの課題

5.3 実験II：ダンス形態への鑑賞者の熟達度による比較及びストリートダンスの印象評定尺度の検証

5.3.1 目的

5.3.2 方法

5.3.3 結果

5.3.4 考察

5.4 研究2-2の総合考察

5.5 今後の課題

第6章 研究3 ダンス映像と音楽の適合度に対する印象評定への鑑賞者の熟達度の影響

6.1 問題の所在と目的

6.2 方法

6.2.1 実験参加者

6.2.2 刺激

6.2.3 手続き

6.2.4 データの分析方法

6.3 結果

6.3.1 因子分析の実施

6.3.2 因子得点による分析

6.3.3 Marginalized Model に基づく GLMMによる分析

6.3.4 実験参加者間の評価一致係数（MM1）による分析

6.4 考察

6.4.1 因子得点による分析

6.4.2 Marginalized Model に基づく GLMMによる分析

6.4.3 MM1による分析

6.4.4 まとめ

第7章 研究4 ダンサーの表現感情への印象評定と感情推定に対する鑑賞者の熟達度の影響

7.1 問題の所在と目的

7.1.1 感情と動作知覚及び身体性の相互作用

7.1.2 感情

7.1.3 動作知覚と感情

7.1.4 身体性と感情

7.1.5 身体性の測定

7.1.6 本研究の目的

7.2 実験I ダンスの感情表現に使用する音楽の選曲

7.2.1 目的

7.2.2 方法

7.2.3 結果

7.2.4 考察

7.3 実験II ダンサーの表現感情への印象評定と感情推定に対する鑑賞者の熟達度の影響

7.3.1 目的

7.3.2 方法

7.3.3 結果

7.3.4 考察

7.4 研究4の総合考察

7.4.1 まとめ

7.4.2身体化シミュレーションと即興の芸術性

7.4.3 今後の課題

第8章 総合考察

8.1 本研究で明らかになったことと目的の確認

8.2 各研究からの今後の課題と主題の検討

8.3 各下位研究における共通性と独自性

8.4 普遍性と多様性とは何か

8.5 問題提起に対する本研究の成果

8.6 今後の展望

謝辞

引用文献

(3) 各章の要旨

第1章（研究背景と問題提起）では、ダンスの評価研究に関するこれまでの研究について概観し、問題を整理した。ダンスアートにおける美的評価をダンサーと鑑賞者の相互作用の中で生じる鑑賞者間の評価や解釈の共通性や鑑賞者の背景となるダンス経験による独自性に本質があるものとして定義した。ダンサーは音楽や感情を身体運動として表現し、鑑賞者はそれを自身の経験や嗜好に基づいて再解釈する。この二重の解釈過程により、多様な意味生成が生じる点にアート性があると論じる。先行研究として、ダンス評価に関する生理学的基盤や文化間比較、ジャンル差、感情表現研究などをある程度体系的に整理し、ダンスが生物学的普遍性と社会文化的多様性の両方を併せ持つ表現であることを示す。その上で、「ダンスアートにおける美的評価の普遍性と多様性とは何か」を本研究の中心的問題として提示した。

第2章（問題提起における本研究の位置付け）では、第1章で提示した問題意識を踏まえ、本研究の目的をダンスの生物学的根拠と社会文化的根拠を統合的に検討することと明確化する。そのアプローチとして、表現者と鑑賞者の相互作用、身体性、熟達性を中核概念として整理し、美的評価における共通性を定量的に捉える手法として Mean Minus One (MM1) を導入する意義を示す。さらに、ジャンル差や芸術領域差、ダンス形態、音楽との関係、感情表現と身体反応という複数の視点から構成される下位研究の仮説と全体構造を提示し、本論文が理論・実証・実践研究を架橋する試みであることを位置づけた。

第3章（研究1）では、ダンス鑑賞における美的評価が鑑賞者の熟達性によってどのように変化するかを検討した。複数ジャンルのダンス映像を用い、鑑賞者のダンス経験や総練習時間、印象評定を測定し、一般化線形混合モデルおよびジャンルごとの MM1 の比較による分析を行った。その結果、熟達者ほど評価の再現可能性を重視し、特定ジャンル内で評価の一致度が高まる一方、非熟達者ではより感覚的・情動的評価が支配的であることが示された。これにより、美的評価には鑑賞者間で共有される普遍的側面と身体経験に基づく独自の側面が併存することが実証的に示された。

第4章（研究2-1）では、ダンスと絵画という異なる芸術領域を対象に、美的評価の構造に共通性が存在するかを検討した。SD法による印象評定データに因子分析を実施し、各領域に固有の因子と共通因子を抽出した。その結果、ダイナミックさや情動的評価といった因子は領域を超えて共通しており、芸術一般に共有される評価次元の存在が示された。一方で、没入感や身体性に関わる因子はダンスに特有であることも明らかとなった。これらの結果から、美的評価は領域横断的な普遍構造を持ちながらも、表現媒体に応じた独自性を内包することが示唆された。

第5章（研究2-2）では、ソロ・ショーケース・サイファーといった異なるダンス形態が鑑賞者の印象評定に及ぼす影響について、鑑賞者の熟達性との関係から検討した。研究2-1で作成したストリートダンス印象評定に関する評価尺度を用いて分析を行った結果、形態ごとに評価されやすい因子が異なり、特にサイファーでは即興性や相互作用性が強く評価に反映されることが示された。ダンス形態は単なる表現形式の違いではなく、鑑賞者とのコミュニケーション様式を規定し、美的評価の構造そのものに影響を与えることが明らかとなった。

第6章(研究3)では、ダンス映像と音楽の適合／不適合が美的評価に及ぼす影響を実験的に検討した。音楽と身体動作のリズムや構造を操作した刺激を用いた結果、不適合条件ではダイナミックさや卓越性の評価が有意に低下することが示され、鑑賞者における身体化シミュレーションやリズム同調が阻害された結果として解釈された。本研究を通して、ダンス鑑賞における音楽の役割を情動喚起と身体同調の観点から定量的に示すこととなった。

第7章(研究4)では、ダンサーの感情表現に対する鑑賞者の反応を、それ以前の章で使用した印象評定やMM1分析に加えて、筋電図測定を組み合わせ検討した。結果として、熟達者は単なる動作模倣ではなく、感情表現に応答する形で即興的な身体反応を示すことが明らかとなった。特に体幹筋の活動が音楽と同期して変化する点は、鑑賞が能動的かつ身体的な過程であることを示している。

第8章(総合考察)では、全下位研究の成果を統合することで、ダンスアートにおける美的評価の普遍性と多様性を再定義する試みを行った。本論文に含まれる4つの研究をもとに、リズム同調や感情喚起に基づく身体反応を生物学的普遍性として位置づける一方で文化的背景や個人の経験、嗜好が評価の独自性を形成する社会文化的要因として整理した。これらの相互作用によって、ダンスは感情と身体、さらには人々を結びつける社会的機能を果たすと結論づけた。本研究は、ダンス研究を心理学・実験美学・実践研究の接点に位置づけ、芸術研究の理論的拡張にも寄与するものと位置づけた。

3. 審査要旨

本論文の審査会は、2026年1月21日(水)10時より開催され、本社会学研究科より2名、亜細亜大学より1名の外部審査員を含め、感性心理学、実験心理学、感性工学、ダンススタディの観点から総合的に審査が行われた。本審査では、本論文に基づく三好香次君による説明および質疑応答を通して評価がなされた。なお、本審査会は公開で実施され、審査員以外に2名の参加があった。

ダンスの美しさや身体的動作の印象を評価する研究は、「美的経験はどこまで共有され、どこから個人的なものとなるのか」という、心理学、芸術学、舞踊学に共通する根源的問題を扱うものである。従来のダンス研究は、舞踊学や教育学、文化人類学といった分野を中心に、多様な舞踊ジャンルを対象としつつ発展してきた。一方で、心理学においてもダンスは取り上げられてきたが、研究目的や方法論の制約から、対象とするダンスのジャンルは限定される傾向にあった。その中で、本論文で取り上げられたストリートダンスは、サブカルチャーに端を発し、近年ではスポーツとしても発展を遂げてきたジャンルであるが、心理学の文脈において、美的評価を実証的に扱う研究の体系的蓄積は必ずしも十分とはいえなかった。また、ダンス実践者の価値判断は、暗黙知・身体知・実践知として言語化されにくい形で共有されることが多く、そのことが評価の在り方にも強く反映されてきた。

このような研究背景のもと、三好君の博士論文は、主に以下の四点において評価される。

第一に、ストリートダンスにおける美的評価を、感情・身体・認知の相互作用として捉え、単なる印象評価研究にとどめていない点である。ストリートダンスと他のダンスジャンルと

の関係性、あるいはストリートダンス内部における多様なジャンル間の連続性や差異を実証的に明らかにすることは、極めて困難な作業である。本論文では、ストリートダンスを対象とするための方法論的調整を行い、研究を進めている。鑑賞者自身のダンス経験を練習時間として操作的に捉え、経験に基づく身体化シミュレーションが評価基準の形成に影響を与え、ダンサーと鑑賞者の解釈の相違を生み出すと考えた点は、本研究の理論的中核をなすものである。なお、ダンス経験の熟達度と身体化シミュレーションに基づく美的評価に関する研究成果は、2024年に感性工学会誌に掲載されている。

第二に、特定ジャンルの経験者以外には「評価が難しい」とされてきたストリートダンスの美的評価を、単純な平均化に回収することなく分析しようとした点が評価できる。具体的には、ダンス練習時間を指標とした熟達性を独立変数とする一般化線形混合モデルに加え、評価一致係数 **Mean Minus One (MM1)** を導入し、美的評価の構造を精緻に検討している。また、印象評定と生理指標を組み合わせることで、ジャンル間・形態間、さらにはダンスと絵画といった異なる表現様式の比較を行っている点も方法論的意義が高い。加えて、社会科学研究科紀要に掲載された、ジャンルを超えてダンスを美的に評価するための尺度開発も、本論文の重要な成果として評価される。

第三に、ダンスにおける暗黙知や身体知を「鑑賞者の評価」という観測可能なデータへと変換し、ジャンルや形態の差異に着目することで、美的評価における「普遍性と多様性」を心理学的に検討しようとした点が挙げられる。ストリートダンスを対象とした知覚・評価研究の先行研究が極めて限られている現状において、本研究は、身体運動に宿る美的経験を、身体化された認知と熟達によって獲得される文化の交点として捉え、芸術理解を共有可能なものとして再構築しようとする試みとして評価できる。

第四に、本研究がストリートダンス研究にとどまらず、「人はなぜ身体運動に美を感じるのか」というより普遍的な問いへの貢献を志向している点である。鑑賞者の熟達性、芸術領域差、ダンス形態、音楽との適合、感情表現と身体反応といった複数の観点から一貫した実験的検証を行い、評価には領域横断的な普遍構造と、身体経験に根差した多様性が併存することを示している。特に、筋電図を用いた最終研究は、鑑賞が受動的な知覚過程ではなく、感情に応答する身体化された即興的過程であることを示す重要な知見である。

以上のように、本論文は、ダンスにおける美的評価の普遍性と多様性がいかに成立するかを実験心理学的に解明しようとした点に独創性を有する。従来のダンス研究が文化論的・記述的研究、あるいは実践的効用に焦点を当てた研究に偏りがちであったのに対し、本研究は鑑賞者の主観的経験を定量的に扱い、生物的基盤と社会文化的要因を統合的に検討することで、ダンス評価の理解を深化させようとした点で、博士論文として堅実な成果を挙げている。

一方で、論文審査および公開審査会における質疑応答を踏まえ、以下の点については批判的検討も必要である。まず、主査・副査より、用語の一貫性がない箇所や繰り返が多い箇所、さらに論文としての表現が適切ではない箇所、誤植等の指摘があり、それらの部分については博士論文としての適切性のために修正を求めたことについて言及しておきたい。その

上で、主査・副査より以下の点について言及された。

まず、理論的枠組みの必然性について、本論文は美的評価を身体・感情・認知の相互作用として捉える枠組みを提示しているが、本研究でなければ導けない必然性が十分に確立されているかについては、慎重な検討を要する。「普遍性と多様性」という枠組みが、結果の事後的整理にとどまらず、理論的予測としてどこまで明確に提示されているかについて、より厳密な自己評価が求められる。著者自身が長年高い水準でストリートダンスに取り組んできた経験が、研究動機としての強みである一方で、テーマ設定においては実験美学で頻繁に扱われる枠組みとの接合が先行した印象も否めない。身体性に焦点化した研究（研究1・研究4）と、尺度化およびジャンル・形態比較を行った研究（研究2・研究3）との理論的接続について、より踏み込んだ整理が望まれた。

また、鑑賞者の熟達性を考慮した実験設計や、生理指標を含む方法論は評価されるものの、用いられた指標が美的評価そのものをどこまで適切に捉えているかについては、なお議論の余地がある。特に、生理反応と主観評価との対応関係や、測定されなかった要因の影響について、限界の明示が十分であったとは言い難い。関連する先行研究のレビューや批判的整理がやや薄く、結果のメカニズムに関する考察も今後の課題として残されている。さらに、本研究は一般原理の探究を志向しているが、得られた知見がどの範囲まで一般化可能であり、どの点がストリートダンス固有の現象であるのかについて、より厳密な切り分けが必要である。対象の特殊性が強みであると同時に制約であることを踏まえた議論の深化が望まれる。

以上を総合すると、本論文は、身体表現における美的評価という困難な課題に真正面から取り組んだ意欲的かつ独創的研究であり、方法論的工夫や実証的蓄積において一定の学術的貢献をなしている。一方で、理論的枠組みの精緻化、方法論的限界の明確化、一般化可能性の整理といった課題も残されている。これらはいずれも本研究の根幹を損なうものではなく、今後の研究の深化によって発展が期待される論点である。

公開審査会においては、質疑応答にやや不十分な場面も見受けられたが、これについては研究者としての経験を重ねる中で改善されることが期待される。なお、現職の中学校教員として多忙な職務を担いながら、コロナ禍に博士課程へ入学し、休学および単位取得退学後の期間も含めて研究と仕事を両立させ、本論文を完成させた努力は特筆すべき点である。しかしながら、厳しい指摘や批判については、今後も研究者として真摯に向き合うことが求められる。なお、本論文に含まれる研究は、すでに査読付専門誌（感性工学会誌）に第一著者として掲載されており、社会学研究科紀要にも1編が掲載されている。これらの研究実績を含め総合的に判断すると、本論文は、これまで心理学研究では十分に扱われてこなかったストリートダンスを対象に、実証的かつ体系的に研究を行った成果として高く評価できる。

以上を踏まえ、本論文は博士（心理学）の学位論文として求められる水準に達していると判断し、三好香次君に博士（心理学）の学位を授与することが妥当であると結論づける。